

個別報告の後、コメンテータの小島伸之氏（上越教育大学）より様々な角度からコメントを頂いた。多岐に亘った論点の中で、環境倫理に関する東洋・西洋というコンテクストの差異をどう考えるか、科学技術・文明に対する評価の差異、等という思想的な検討課題と、各宗教運動毎の環境活動の特徴の類型的把握（付加型・転換型）、環境倫理の啓発対象の射程による類型的把握（本部型・会員型・社会型）等という運動論的な検討課題に関するコメントは、本パネルにとって、とりわけ重要な指摘だと思われた。他方、フロアからは、西康友氏（中央学術研究所）、西山茂氏（東洋大学）等から、コメンテータの論点をさらに深化・拡張させる指摘・議論が提出され、個別発表では報告されなかった事情や事態についても議論が展開し、活発な議論が交わされた。

もちろん、各宗教・現代人の環境倫理ないし環境活動を検討する作業は端緒に着いたばかりであり、本パネルも、いくつかの重要な課題を積み残す形で閉じざるを得なかったが、今後の研究課題を明確にした点において非常に有益なセッションであったと思われる。

なお、最後になるが、本パネルのコメンテータを快諾して下さっていた故望月哲也先生のご冥福をお祈りすると共に、急な要請にも関わらず、コメンテータを引き受けて下さった小島氏に改めて感謝申し上げたい。

新しい近代日本仏教研究へ

—— 自他認識・国民国家・社会参加 ——

代表者・司会 オリオン・クラウタウ

コメンテータ 島蘭 進

近代移行期における真宗

—— 護法論を中心に ——

岩 田 真 美

近年、近代日本仏教研究は大きく進展しつつある。しかし、近世から近代への移行期における仏教は「廃仏毀釈」なる用語で概括されているのが現状であり、「近世排仏論」廃仏毀釈の惹起↓墮落した僧侶の覚醒」という近世仏教墮落論的な図式は未だ主流である。本報告では、墮落した僧侶の覚醒の過程として描かれてきた護法論を再考するが、幕末維新期の仏教界において、最も意欲的に護法運動を展開したのは真宗であったといわれていることから、真宗の護法思想を中心に検討したい。そして、近世から近代への仏教思想の展開ならびに「近代仏教」の始原を考えることを目的とする。

柏原祐泉は、「護法論」とは「排仏論」への対応として表れたものと指摘する。いわゆる「排仏論」とは仏教批判の言説群の総称であるが、「護法論」とは仏教批判に対して、仏教側が自己の正当性を主張したものといわれてきた。しかし、一旦、そのような捉え方を離れ、真宗における「護法」とは何であっ

たのかを考え直してみたい。

幕末維新期に『斥邪漫筆』『斥邪二筆』『寒更叢語』など、多くの護法論を著した超然(一七九二—一八六八)は、西本願寺を代表する護法僧の一人であった。しかし、彼が護法意識に目覚めるのは、三業惑乱という教団内の異安心事件が契機となったといわれる。つまり、超然にとって「護法」とは、内外の危機から教団(西本願寺)を護ることであった。三業惑乱後の教団体制を立て直すという超然の護法意識は、幕末に近づくに従い、排仏論が激しさを増す中で仏法を護るという対外的な意味での護法思想へと展開していったと考えられる。

次に、近世から近代への真宗教学の展開と護法思想との関係について検討してみたい。真宗の近代教学の基本理念となる「真俗二諦」思想が形成されるのは、近世後期であり、文化・文政期の頃、性海(一七六五—一八三八)が著した『真俗二諦十五門』が、その嚆矢ではないかといわれている。福岡光超は、性海が「真俗二諦」説を提唱した理由について、文化・文政期の頃には国学者の排仏論が激化し、仏教の非国益性が激しく非難されたため、真宗の教えそのものが国益性を有することを示すことで、排仏論に対抗しようとしたと指摘している。すなわち、福岡説を踏まえると、真宗の近代教学としての「真俗二諦」思想は、近世的排仏論に対抗する護法思想から生じたということになる。

続いて、幕末維新期における東西両本願寺の護法運動についても検討しておきたい。西本願寺の僧侶養成機関であった学林では、明治元年(一八六八)に外学科を新設し、その中に暦

学・国学・儒学・破邪学などの学科が設置された。同年、東本願寺でも学寮の分寮として、護法場が創設され、国学・儒学・天学・洋学が設置され、護法対策が講じられた。やがて、護法場で学ぶ僧侶らが教団改革を唱えるようになる。彼らはキリスト教や西洋科学などを学ぶうちに、それらに対抗していくためには、まず自己の在り方(封建的な教団体制など)を改めることが必要だと感じるようになり、教団改革こそが護法の急務だと考えるようになった。かくして、護法場の僧侶たちは、本山家臣らと激しく対立したが、明治四年(一八七一)には坊官制が廃止された。そして、石川舜台(一八四二—一九三一)など護法場で学んだ僧侶らが本山宗政を担うこととなった。

結論として、従来は排仏論への対応としての護法論の側面ばかりが取り上げられてきたが、教団内の危機に対応するという意味での護法思想もあつたことを指摘しておきたい。また真宗の近代教学として「真俗二諦」は護法思想から生じたものであり、さらに護法思想は教団改革思想とも結びついている。真宗の「近代的」で「先駆的」な性格(教団形成など)を考える上でも、幕末維新期の護法思想は重要な意義を持つといえよう。